

ベンゾジアゼピン系薬剤の処方実態調査と新たな不眠治療への介入 第2報～過去1年間の外来での処方調査～

○外ノ池 文乃^{1,3}, 松山 奈央², 戸田 裕二², 堀田 祐志³, 川出 義浩^{1,3}, 近藤 勝弘¹, 中山 明峰^{4,5}, 木村 和哲^{1,3,5} (1名市大病院薬, 2名市大薬, 3名市大院薬, 4名市大病院睡眠セ, 5名市大院医)

【目的】ベンゾジアゼピン系薬物は傾眠やふらつき・転倒といった副作用だけでなく依存や離脱症状が出現することが明らかになり、世界中で適正な使用が求められている。高齢者のベンゾジアゼピン系薬物の使用は転倒のリスクが高く、認知機能障害を悪化させる可能性も指摘されており特に注意が必要である。しかし本邦では他国と比べて大量のベンゾジアゼピン系薬物が処方されており、WHOがその処方量の多さは不適切な処方があると指摘している。我々は過去10年間の調査により名古屋市立大学病院においてもベンゾジアゼピン系薬物が多く処方され続けていることを明らかにした。この結果を受け、①ふらつきや転倒・転落②依存③耐性の3つの主な副作用に着目し、実際にこれらの処方が患者に及ぼしている影響を調査した。

【方法】2014年4月1日から2015年3月31日までの1年間に当院を外来受診した患者を対象とし、睡眠薬を処方された患者の診療科や年齢を調査した。処方された患者数を総外来患者数で除した数値を処方割合とした。

【結果】一般診療科からの処方割合がこころの医療センターと並んで多かった薬剤はエチゾラムとゾルピデムであった。また一般診療科の中で循環器内科と膠原病内科では特に睡眠薬の処方量が多かった。80歳以上の患者に対するエチゾラムの処方割合は循環器内科で4.0%、膠原病内科で3.3%でありこころの医療センターの2.6%よりも多かった。

【考察】一部の診療科で高齢の患者に睡眠薬が多く処方されていた。一般診療科の医師が不眠を訴える患者に睡眠薬を処方する機会が多い。薬剤師としてそれぞれの睡眠薬の利点と危険性を熟知し、不眠治療に介入する必要があると考える。